

# なので

最近、若い人たちの間で、新しい接続詞ができています。「なので」である。

話し言葉だけでなく、書き言葉での使用も目にする。意味としては、基本的に「だから」とよく似ている(違ふところもある。なので取り上げました)。

もとは「名詞+なので」という形だったが、「来週、実習があるんです」なので、出席できないんです」というように使う。「なので」だけで文節になるから接続詞だということになる。もっとも、接続詞としての「だから」も「来週は実習だから出席できない」のように、「名詞+だ+から」という形からできている点は先輩だ。この「だ」の部分、断定の「だ」がいれば化石的に残っていて、接続詞でありながら、

「ですから」なんていう丁寧形の使い方もある。

ただし、接続詞の「だから」自体はあっぱれなことにいろいろな用法を持っている。例えば、「だからあ、言ってるでしょ。違つてば」のような使い方だ。述べる内容の順接関係というより、わかってくれない相手に対して強引に順接的に論理を乗っ取って自分の主張に流し込むようないわば注釈用法だ。話し言葉専用だが。

さらに、「ははあ、だからですか」のような使い方もあって、あとに断定の表現を続けて、相手からの情報と自分の思考を組み合わせることもできる。新参の「なので」には、このような用法はない。では、「なので」の個性

とは何だろう。ここで参考になるのが「〜から」と「〜ので」の違いだ。「ので」にあるのはやわらかさだ。例えば、言い訳をする場合、「事故があったから遅れました」よりも「事故があったので遅れました」の方がやわらかい。特に自分の事情を言うような場合、「だから」では理が前面に出すぎる。その点、「なので」は、「〜なのだ」のように事情をまとめる形と「〜で」という少し曖昧に続く形とから成り立つ点で、ややほんわかと理由を表せる。この接続詞にもそれなりの持ち味がありそうなのだ(「それで」などとの相違点の検討も必要だが)。

なので、「なので」は、これからも残っていくのではないだろうか。

京都教育大学教授

森山卓郎